

『家でのこと 訪問看護で出会う13の珠玉の物語』

土管と写真

(書評者)

村上靖彦

大阪大学人間科学研究科・教授



**家でのこと
訪問看護で出会う13の珠玉の物語**
高橋恵子＝著
定価：1540円（本体1400円＋税10％）
2021年2月発行
医学書院

マンガだからこそ表現できるものがある

おそらくこの本の読者は、作者の優しい目線にほっとすると思う。患者さんも家族も看護師さんも、優しい人たちが全ページカラーで描かれている。

引きこもりの息子がいる父子家庭で、自分の好きなブラモデルだけ買って介護を放棄しているように見える中年の息子が、実は父のことを細かく気づかっている、味噌汁をマグカップで出す場面。看護師がケアしていると思っていたら実は患者さんのほうが看護師を気づかっている、心臓病をおしてドラッグストアに並び看護師のためにマスクを買ってきてくれる場面。

患者さんの目線に立つことの難しさと細かい機微は、文章で記すよりもマンガというメディアで表現したほうが、もしかしたら伝わるのかもしれない。

医療的ケア児の鼻から伸びたチューブに貼られるファンシーな絆創膏。3本の傘が部屋の中に立ち缶が転がるごみ屋敷の部屋に立てかけられたセピア色の写真と伸びた爪など、その場所にいたことがある人にしか描けないディテールが、マンガの世界観を支えている。

訪問看護の多様な関係者、場面が描かれる

本作品の大きな特徴は、訪問看護の多様な利用者や関係者が描かれていることだ。訪問看護と言えば、世間では「高齢者の慢性疾患のケアと看取り」というイメージが強いかもしれない。しかし実際には、精神疾患を持つ人、医療的ケア児、若年者の看取り、若年性痴呆症、孤立し貧困の中にいる高齢者、あるいは長期化した引きこもりの人など、さまざまなケアのニーズを持つたくさんの人たちがいる。

そして都市での訪問もあれば、山村での訪問もある。ヤングケアラーや中国残留孤児といった、社会状況により困難をかかえることになった人々も描かれる。普段接しない民生委員といった役割を負った人も登場する。

ファンタジーとリアルが交差する世界で

私と『家でのこと』とのご縁は、第2、3話のストーリーを作る際に、拙著『在宅無限大～訪問看護師がみた生と死』（医学書院）に登場した看護師さんの言葉から、作者の高橋さんがアイディアを汲んでくださったことに始まる。私の本に登場するたくさんの看護師さんたちの実

践もきっこうであったのだろう、というリアルな描写で描いてくださった。私が思い描いていた以上の繊細な描写である。

実は高橋さんが採ってくださった第2話の「土管」のエピソードは、『在宅無限大』とのあいだで少し違いがあるのだが、この違いが、私の中でばらばらだった経験をつなぎ合わせるようになった。

『在宅無限大』のFさんの語りは、医療的ケア児を訪問する場面についてだった。障害を持つ子どもを生み育てる母親はさまざまな葛藤を持つ。母親の信頼を受けて心を通わせるためには、土管の中でひそひそ話をするような繊細な気遣いが必要になる、とFさんは語っていた。これに対し、『家でのこと』の第2話の土管の場面は、精神疾患を持つ独居の女性の「ごみ屋敷」を看護師が訪問する場面になっている。看護師が患者の小さな声をそっと聴くことで、思い出の中に生きる女性と、かすかだが継続的なコンタクトが続く。それを土管の中という描写で描いている。

それぞれの記憶が想起される

この第2話を目にした時、別のある場面を思い出した。フィールドワーク中に出会った、活字にはしたことがない場面だ。

精神科の訪問看護にくっついて、さまざまな患者さんを訪問していた時のことである。ある独居の女性が、某宗教団体の代表者の名前がついた（入口に銅像も建っていた）古いアパートに住んでいた。その階段を上がると、患者さんがすでにドアの外に出ていて手を振って出迎え



『家でのこと』 p22-23 より



てくれた。2週間に1回の訪問を待ちわびていたようだ。

部屋に入ると、秋口で寒くなっていたが窓は開け放してあって、網のない壊れた扇風機が3台置いてあった。患者さんと訪問看護師と私で膝を並べて座ると、彼女は埃のかぶったちゃぶ台の全面に並べてあったセピア色の写真を私たちに説明してくれた。後で訪問看護師さんから、今はもう音信不通の患者さんの娘たちの写真だと伺った。

その女性の姿と扇風機の部屋、そしてセピア色の写真が、第2話とそっくりなのだ。私が訪問した場面は、第2話の後日談であるかのようだ。患者さんの苦労が堆積したような部屋で、10年、20年の時間の流れを経ておだやかになっていく人生、そして家族とは途絶えたとしても支援者と再び縫い直される人間関係があった。支援者が丁寧にかかわることで、苦労や傷の核がほどけてくることもある……マンガを読みながら、私は数年前の出来事を振り返った。

たぶん本作品は、読む者をそれぞれの記憶にある特定の場面へと立ち返らせる力があるのだろう。ページの中の一場面と、自分の経験のなかの一場面とが結び合わさることで、忘れていた記憶が初めて鮮明にたち現れることもあるかもしれない。そんな作品である。

精